
アップルティー

本。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アップルティー

【Nコード】
N6824M

【作者名】
本。

【あらすじ】
《全てが生きている世界》の、ある女の子と、あるリンゴと、ある角砂糖のお話。

（前書き）

微笑んだ物語程、悲しみえをはらんでいる。そうおっしゃった作家さんがいます。そんなお話を目指しました。行方不明だったファイルから発掘第一弾です。

甘いリンゴに甘い砂糖。それって、最強のコンビだと思いませんか？

何処かにある海の近くに、小ぢんまりした可愛らしい家がありました。

そこには、1人の少女が住んでいました。

「さあ、今日も張り切って過ごしましょう！」

これは、全てが生きている世界の、小さくて大きな物語。

少女の名前はミア。この《全てが生きている世界》の、人間の女の子の住人です。

ミアと一緒に住んでいるのは、リンゴのレンと、角砂糖のマト。レンは女の子で、マトは男の子です。

レンもマトも非常に優れた種族だったので、話すことはもちろん、歩くことも、物を持つことも、食事をすることも出来ました。もちろん、ミアが住んでいる家も、家にある家具なども、皆生きてはいるので、話せる程の知能を持っているのは、ミアとレンとマトを除くと、家であるルアだけでした。

「見て、レン。今日はとっても良い天気よ」

「ええ、そうね、ミア。今日はとても良いピクニック日和だわ」

「それを言うのは今日で35回目だよ。春になってからずっと言ってるじゃないか。今日、ピクニックに行ったら、当分の間は騒がない約束だからね。覚えてる？」

人間の女の子、ミアと、リンゴのレンと、角砂糖のマトは、とても仲良しです。どうやら今日は皆でピクニックに行くようです。

「ええ、ええ、覚えているわ。だから言ったんじゃない。ねえ、ミア」

「ええ、そうね。レン」

「全く…。じゃあ、そろそろ行くよ！ルア、行ってくる」

マトがこの家であるルアに声をかけました。

「はい。羨ましいいわ、ピクニックなんて。楽しんで来てね！」

「ええ、ありがとう、ルア」

「綺麗な貝殻、拾ってくるわね」

ミアとレンがルアにそう返します。

「行ってくるよ」

ミアとレンとマトの声とが重なります。

「行ってらっしゃい」

ルアが応えました。

ミアとレンとマトが暮らしている、ルアから、大分離れた場所。そこにもまた、海が広がっていました。ただ、ルアの近くにある海より、美しい色をしていました。

どこまでも伸びる透明な美しい青に、ほんの少しのきらめく緑。それはまるで幻想のようで、そしてまたどこまでも現実感のある色でした。

「今日もまたこの海は美しいのね」

ミアが呟きました。ため息を零す様に、自然に。そうすることがまるで、当然のことの様に。

「ええ、本当に。いつ来ても、この海は美しくあるわ」
レンがそれに応えます。

「まあ、別に…まあまあかな」

安らかな顔をして、マトが言いました。

「またまた。マトは本当に素直じゃ無いわね」

レンがマトをからかう様に言いました。

「なっ…別に、そんなこと、無い」

「マトは、自分が思ってるのと反対のことを言う時、ちょっと声が上がって直ぐに分かるのよ」

ミアが、口元に手を当ててくすぐすと笑いました。

これには流石のマトも何も言えません。真っ赤になって口をつぐみました。

「さあ、お昼にしましょう」

ミアが優しく綺麗に微笑みました。

ミアとマトとレンは、自分達が敷いた真っ白いシートの上に座って、お弁当を広げていました。

桃色の可愛いお弁当箱と、薄紫色のプラスチック製のお皿が、白と青と緑だけのその場所から少し浮いていました。

「いただきます」

ミアが嬉しそうに言います。

「いただきます」

レンとマトも、少しだけ悲しそうな顔をして言いました。

お弁当の中身は、アップルパイやリンゴのタルト、水筒の中身はアップルティーです。とにかく『リンゴ』と『砂糖』をたっぷり使った食べ物ばかりなのです。

お弁当を作ったのはミアでした。これだけ見れば、ミアがレンやマトに意地悪をしている様に見えますが、そうではないのです。

レンはリンゴで、マトは角砂糖です。ですから、何であっても食べられることは食べられるのですが、一番栄養をとれるのは、自分と同じ種類のものを食べることなのです。なので、ミアは自分が食

事当番の時は、なるべくリンゴと砂糖をたくさん使った料理を作っているのです。それがミアの優しさでありました。

「甘くて、美味しいわ。私、アップルパイ大好きなの。ごめんなさい、もう飽きてしまった?」

ミアが言いました。何気ない様で、残酷な様で、何処までも優しい言葉でした。

「いいえ、大丈夫よ、ミア」

「ああ、ミアは料理が上手いからね」

レンとマトが言いました。静かだけれど、愛おしそうな声でした。「そう、良かったわ…。でも私、アップルティーが一番好きなの。甘くて、酸っぱくて…大好き」

ミアがカップを手に、胸をきゅっと掴まれるような、甘い声で言いました。

「ええ、私もアップルティーは好きよ。何だか、ほつとするの」

レンが言いました。

「僕も、アップルティーは好きだよ。何だか、甘さが、砂糖だけじゃなくて、リンゴだけじゃなくて、…何とも言えない、アップルティーの甘さなんだ」

マトが呟く様に言いました。

「ふふふ」

ミアが笑いながら、アップルティーの入ったカップを手に、海の方へと歩いて行きます。いつの間にか裸足になっていました。

「レン、マト、大好きよ。ずっと私と一緒にいてね」

レンとマトの方を真っ直ぐに見ながら、ミアが言いました。そのまま後ろへと、ぼちゃ、ぼちゃと音を立てて一歩一歩下がって行きます。

「ミア、前を見ないと」

危ないよ、とマトが続けようとした時、

「きゃあっ」

ミアが小さく悲鳴を上げて、後ろの方へすってんころりと転び

ました。

「「ミアッ」」

レンとマトの声が重なり、ミアの元へと駆け出します。

「ミア、大丈夫？」

レンがミアの隣まで泳いで来ると、尋ねました。

「だっ大丈夫……」

「全く、心配かけないでよね」

マトが呆れた様に言いました。

「ごめんなさい……でも、ほら！見て、空」

レンとマトが空を振り仰ぎます。

風が、さらさら。雲が、ふわふわ。

「気持ち良いね」

ミアとレンとマトは、海にぷかぷかと浮き沈みしながら、空を見て、瞳を閉じました。

「あっ」

ミアのカップは何処かに無くなって、代わりに海全体がアップルティーになっていました。

甘い甘い、アップルティーに。

「嬉しいね、レン」

「ええ、それに、美味しいわ」

ここは《全てが生きている世界》ですから、もちろん海も生きていて、それでミアとレンとマトは、いつもこの海のことを美しいと言っていましたので、海は常々お礼をしたいと思います。

「ありがとう、海さん」

ミアがお礼を言うと、ほんの少しアップルティーの海が桃色になりました。

「ねえ、何だか幸せね」

「ええ」

「ああ」

ぷかぷか、ぷかぷか。女の子と、リンゴと、角砂糖が、アップル

ティーの海で浮き沈みしていました。空を見ながら、実に幸せそうな顔をして。

甘いリンゴに、甘い砂糖。それって、最強のコンビだ
と思いませんか？

ねえ、だから アップルティーって、

凄いやね？

（後書き）

マトは溶けません。優れた角砂糖なので。

2年ほど前に授業中、リンゴ、海、砂糖の三題で書いたお話。色々
酷いですが、まあ、見逃して頂けるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824m/>

アップルティー

2011年3月11日22時40分発行